４．飯盛山と白虎隊をはじめとする先人慰霊にみる歴史的風致

（１）はじめに

寛政11年（1799）会津藩は、鶴ケ城（若松城）西出丸の濠を隔てた西側において藩校の建設に着手し、敷地約8,000坪、建物約4,000坪の施設は享和３年（1803）に完成し、日新館と称されました。

日新館への入学は10歳から許され、文武両道の28科目のほか、大学や寮を有し、全生徒数は千数百名に及んだとされ、会津論語と称される『日新館童子訓』（享和３年（1803））による教学や、数学、医学、薬学、天文学のほか砲術や泳法など特色ある教育がなされました。

特に、天文学では、現在も一部が現存する天文台が敷地内に設けられ、『会津暦』（寛文５年（1665））の発行に関する検討がなされたほか、泳法では、日本最古のプールと称される石垣積みの水練場での訓練が行われ、戊辰戦争後に個人の所有となり、昭和30年（1955）頃まで水練場が現存していました。日新館での文武の鍛錬を重ねていた会津藩は、慶応４年（1868）の鳥羽・伏見の戦いにおける惨敗を経て、直ちに軍政の改革を行い、兵法や軍制度、兵器類を西洋流に改めました。藩士による正規隊を年齢別に編成し、農・町民による民兵を募り挙藩一致の体制づくりが図られ、部隊は年齢別に四神である「白虎、朱雀、青龍、玄武」隊に編成され、これにより白虎隊が誕生しました。

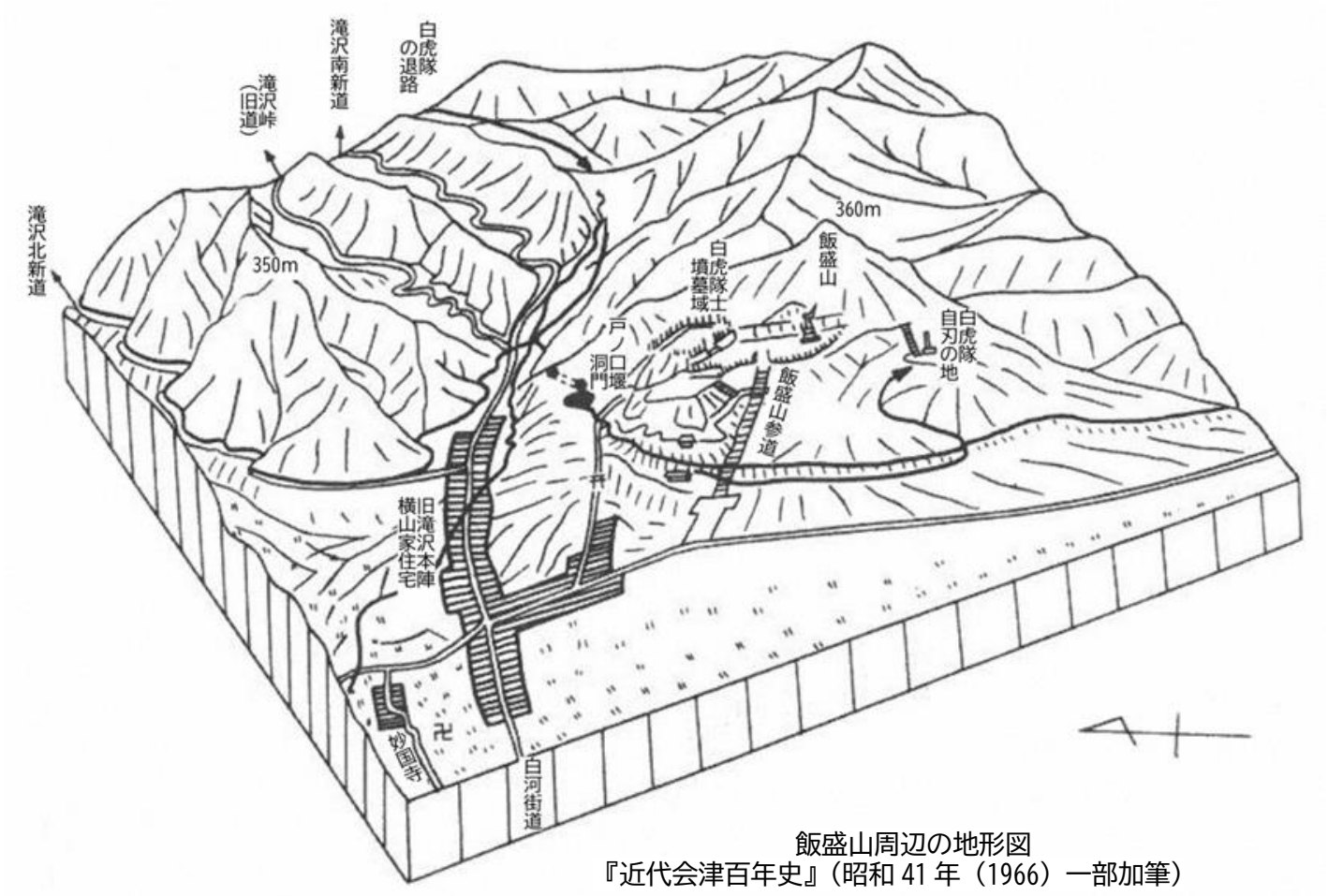
白虎隊をはじめとする各部隊の構成

部隊総称	年齢分け	身分・級分け	小隊数	中隊数	隊員数
白虎隊	16、17歳	士中隊（上級藩士） 寄合隊（中級藩士） 足軽隊（下級藩士）	２	６ケ中隊	約300名
朱雀隊	18～35歳		４	12ケ中隊	約1,200名
青龍隊	36～49歳		１～４	９ケ中隊	約900名
玄武隊	50歳以上		１～２	４ケ中隊	約400名

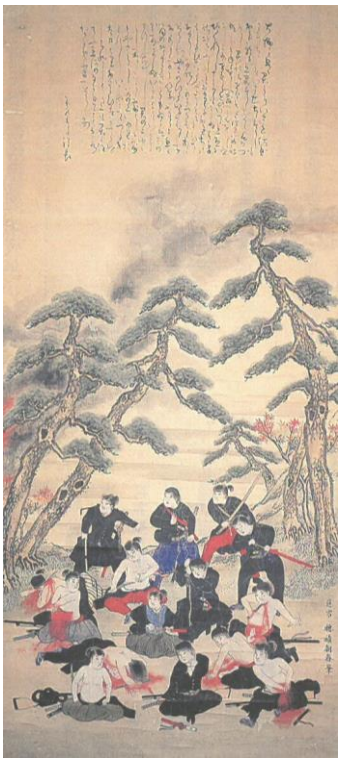
慶応４年(1868)、戊辰戦争の際、滝沢本陣より出陣した16～17歳の少年たちで編成された白虎士中二番隊は、戸ノ口原合戦場から退却し、滝沢峠の間道を下り、戸ノ口堰の洞門をくぐり飯盛山に辿(たど)り着くと、鶴ケ城（若松城）の天守を覆い隠す濛々(もうもう)たる黒煙を目にします。そのとき、隊士の間では城に戻り戦うか、敵陣に斬り込み一人でも多く道連れにするか激論が交わされたとされます。

結果として彼らが選んだのは自刃であり、捕らえられて生き恥をさらすより潔く死を選ぶという、武士としての結論でした。ある者は腹を割き、ある者は喉に刃を突き立て凄惨たる光景であったとされます。西軍は飯盛山で自害した白虎隊士の遺体に手を触れる事を許さなかったとされ、約３ヶ月後、付近の村人らによって飯盛山ふもとの妙国寺に密かに仮埋葬され、改葬が許されたのは明治２年（1872）のことでした。

全員が自決するなか、一命をとりとめた飯沼貞吉によって、白虎隊の忠義と悲運の物語が広く知られるところとなり、春と秋の年２回行われる墓前祭では、白虎隊を偲びその霊を慰める剣舞が奉納されています。



飯盛山周辺の地形図
『近代会津百年史』（昭和 41 年（1966）一部加筆）



白虎隊自刃之図
（会津若松市所蔵）

（２）建造物等

①旧滝沢本陣横山家住宅（国指定の重要文化財（建造物））

旧滝沢本陣御門

戊辰戦争の際は本営となり、慶応４年（1868）藩主松平容保が白虎隊士中二番隊に敵を迎え撃つべく戸ノ口原への出陣を命じたところです。

戊辰戦争では鶴ケ城（若松城）と滝沢峠を結ぶ戦略的拠点となり、座敷には弾痕や刀傷が残され、戦闘の激しさを今に伝えています。

旧滝沢本陣は、江戸への主要な街道であった旧白河街道筋に位置し、会津藩主参勤の滝沢峠越えに備えて、延宝年間（1673-1680）に滝沢組近郷 11 ヶ村郷頭であった横山家に設けられました。

以後、歴代藩主の参勤交代、領内巡視、藩祖保科正之を祀る土津神社（猪苗代町）への参詣に際し休息所として使用されてきました。

旧滝沢本陣は、主屋（重要文化財、裏面切妻造、西面寄棟造）、座敷（重要文化財、寄棟造、茅葺）、名子屋（寄棟造、茅葺）などからなり、ほぼ当時の姿を留めています。

②戸ノ口堰洞門

戸ノ口堰洞門（昭和７年）
洞門で水浴をする人々

猪苗代湖北西岸の戸ノ口から会津盆地へ水を引く全長約 31 kmの用水路であり、元和９年(1623)に八田野村（現河東町八田野）の肝煎、八田内蔵之助が村の周辺に広がる原野に猪苗代湖から水を引いて開墾するため、藩主蒲生忠郷に願い出て、奉行志賀庄兵衛に命じて開削に取りかかったことに始まります。

元禄６年（1693）にそれまでの八田野堰から戸ノ口堰に改名され、藩による工事の中断や私財による整備など段階的に工事が続けられ、天保６年（1835）から３年の歳月をかけ５万人以上を動員した大改修を経て天保８年(1837）に延長約 150m の戸ノ口堰洞門が貫通し、天保９年（1838）に鶴ケ城（若松城）の城下まで用水できるようになりました。

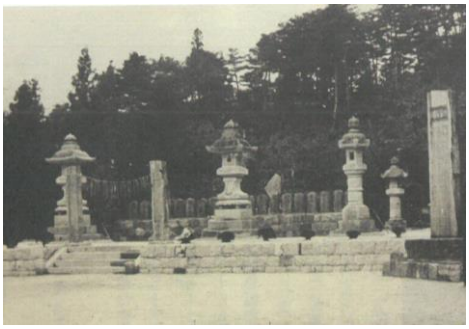
戸ノ口堰洞門（現在）

白虎隊士中二番隊は戸ノ口原に布陣している味方軍応援のため派遣されましたが、戦に利あらずと判断し、帰城の途中、隊士 20 名が通過した洞穴であり、その後の飯盛山での自刃にいたることとなった場所です。

安全対策のため昭和 59 年(1984)に一部改修工事が施されています。

③会津飯盛山白虎隊士墳墓域（国の登録記念物）

明治 16 年（1883）に整備された白虎隊士の墓は、明治 23 年（1890）に墳墓域が拡張されましたが、それでもなお狭く、東武鉄道の創始者である根津嘉一郎と、もと白虎隊士で後に東京帝国大学総長の山川健次郎を中心として大正 14 年（1925）にさらなる拡張工事が行われ、会津の多くの人々も工事の一部を負担し、進んで労力を提供するなどして現在の墳墓域が整備されました。



白虎隊十九士の墓（昭和元年）

墳墓域には、鶴ケ城（若松城）を望んで自刃した 19 人の白虎隊士と各地で戦死した 31 人の白虎隊士の墓碑群があり、同時期に戦死した 62 人の少年武士の慰霊碑が、松平容保の歌碑などと共に祀られています。

白虎隊十九士の墓（現在）
（降り口の階段が増設されている）

正面に配置された白虎隊十九士の墓は、明治 23 年（1890）に現在の形に整備され、右手山側に配置された白虎隊士 31 名（士中３名、寄合 22 名、足軽６名）の墓は、明治 33 年（1900）に建られました。

白虎隊十九士の墓碑

左手谷側に配置された碑は、白虎隊所属の有無に関係なく、領内や京都、新潟、栃木などで大人と一緒に戦い戦死した 14～17 歳の少年武士 62 名の慰霊碑で、平成 13 年（2001）に建られました

白虎隊士の殉難忠節に対する第９代藩主松平容保による弔歌の碑は、明治６年(1873）に建られ、「幾人の涙は石にそそぐともその名は世々に朽ちじとぞ思う」と刻まれています。

④飯盛山参道

大正 15 年（1926）の地元の新聞報道によると、墳墓域の拡張工事と併せて大正 14 年（1925）に表参道の整備に着手し、大正 15 年(1926）に仮完成したとされ、新道は幅約９ｍの切り通しで一直線となりました。その後も整備がなされ、昭和３年（1928）に現在の 183 段の参道が完成しました。

飯盛山参道（昭和 16 年（1941））

飯盛山参道（現在）

⑤旧正宗寺三匝堂（さざえ堂）（国指定の重要文化財(建造物)）

さざえ堂は寛政８年（1796）飯盛山に建立された、高さ 16.5 m、六角のお堂で、正式名称は「円通三匝堂」といいます。当時飯盛山には正宗寺というお寺があり、その住職であった僧郁堂の考案した建物です。その独特な２重螺旋のスロープに沿って当初西国三十三観音像が安置され、参拝者はこのお堂をお参りすることで三十三観音詣りができましたが、現在正宗寺は無く、建屋のみが残され一般に公開されています。珍しい建築様式を採用したことで、建築史上その特異な存在が認められ、平成７年（1995）に国の重要文化財に指定されました。

白虎隊士は戸ノ口堰洞門を潜り、さざえ堂の前を通って自刃の地に向かいました。

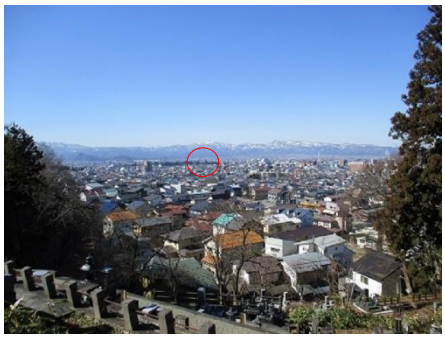
さざえ堂（昭和８年（1933））

さざえ堂（現在）

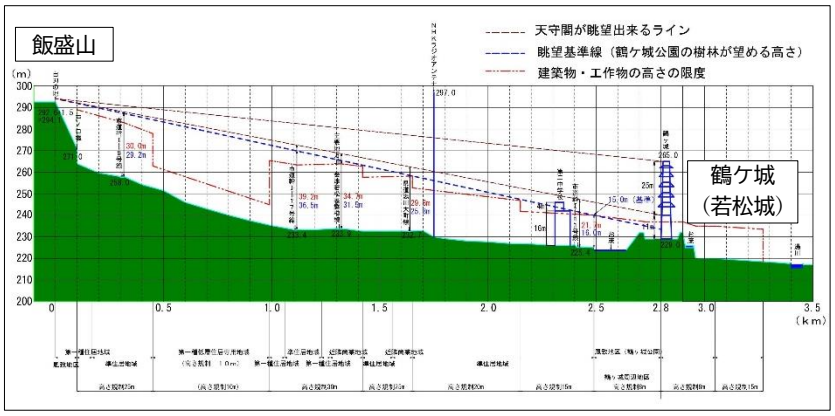
⑥鶴ケ城（若松城）

白虎隊士が飯盛山から望んだ黒煙のなかに見え隠れする鶴ケ城（若松城）は、現在も飯盛山を訪れた者が、当時の白虎隊士と同様に自刃の地より眺望する視対象となっています。また、飯盛山も鶴ケ城（若松城）天守閣への登閣者が眺望する視対象となっています。

市は、この歴史的に重要な区域を、平成 29 年（2017）に会津若松市景観計画に基づく眺望景観保全全地区に指定し、区域内の建築物や屋外広告物等の高さや色彩等について制限し保全を図っています。



白虎隊士自刃の地より鶴ケ城（若松城）天守閣を望む



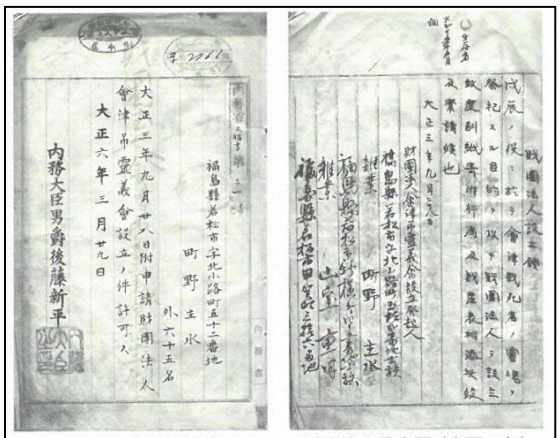
飯盛山と鶴ケ城（若松城）を結ぶ眺望景観保全地区（断面図）

白虎隊士自刃の地より望む鶴ケ城（若松城）天守閣（拡大）

（３）活動

①白虎隊士墓前祭をはじめとする先人慰霊祭

明治も末頃になると旧会津藩士や遺族も少なくなり、今後の祭典の開催や執行において、永続性が心配されました。そこで戊辰50年祭を期して、祭典が未来永劫に渡り行えるよう正式な組織を作りたいという機運が生じることとなり、発起人のなかから会長を選任し、会津弔霊義会（あいづちょうれいぎかい）が設立されました。



設立許可書（大正６年）　財団法人設立願（大正３年）

大正３年（1914）内務大臣宛に財団法人設立の認可申請を行い、大正６年（1917）ようやく内務大臣の名で認可されました。目的は「戊辰の役会津戦死者の霊魂を祭祀するを以て目的とす」として以下のとおりでした。

１.阿弥陀寺並長命寺、飯盛山に於ける戦死者墳墓を永遠に維持すること
２.会津地方に散在する戦死者遺骨を阿弥陀寺に合葬すること
３.飯盛山所在の白虎隊戦死者に関する建造物を永遠に維持すること
４.戦死者の祭典を行うこと

白虎隊士墳墓域や建造物の維持、保存を行うとともに、全国からの参列者を得て毎年４月 24 日と９月 24 日の春秋２回、神式による白虎隊士墓前祭が行われています。

また、戊辰祭の各前日（４月 23 日と９月 23 日）には、戊辰殉難者の供養が、旧会津藩士が多く祀られている長命寺及び阿弥陀寺において執り行われており、旧会津藩士が果たした歴史的役割や精神的遺産を顕彰する取り組みが続けられています。

白虎隊士墓前祭

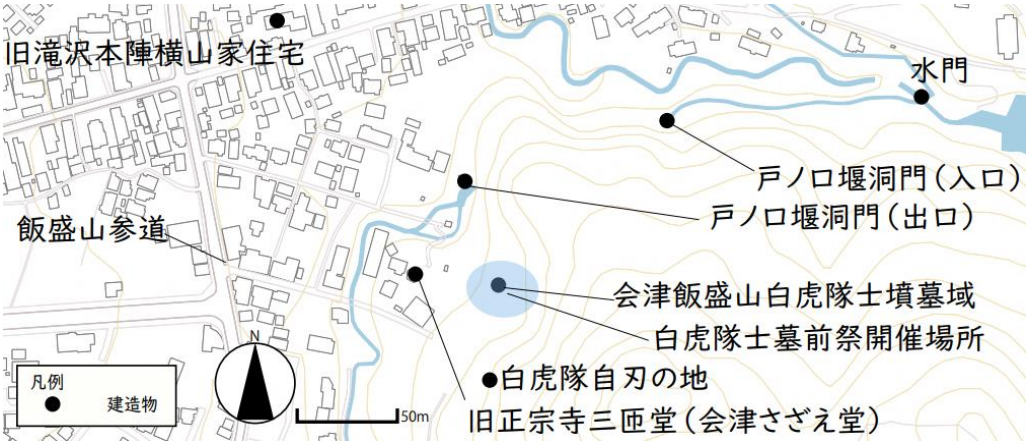
長命寺での祭祀

また会津若松市内では、戊辰戦争で激戦を極めた藩士、諸霊の、慰霊祭や顕彰活動が各町内で行われています。この活動は、墳墓史跡を維持保存し、その霊を慰め、果たした役割、精神を顕彰するものです。

この活動を広く後世に伝えるため、現在も継承されています。

会津若松市において行われている、他の主な先人慰霊祭・顕彰活動等一覧

	名称	開催日	開催地	主催等	慰霊の対象	概要等
1	戊辰殉難者慰霊祭	4月23日 9月23日	阿弥陀寺	会津弔霊義会	戊辰戦没者1,281名	東軍墓地（会津藩戦死者約1,281名が埋葬されている阿弥陀寺）における春、秋の法要です。
2	戊辰殉難者慰霊祭	4月23日 9月23日	長命寺	会津弔霊義会	長命寺での戦没者145名	東軍墓地（激しい市街地戦場での戦没者 145 名が埋葬されている長命寺）における春、秋の法要です。
3	奈與竹碑前祭	5月1日	善龍寺	嫋竹会	会津藩士の妻、母、娘など戦没者233名	昭和3年（1928）に建立された、奈與竹之碑の前で行われる祭礼です。戊辰戦争で自決した家老西郷頼母の家族21人を含む殉難者に対し、葵高等学校による女白虎隊剣舞（薙刀）奉納が行われています。
4	長岡藩士殉節慰霊祭	9月9日	飯寺本光寺	長岡藩士殉節顕彰会	長岡藩士戦没者43名	西軍に囲まれ戦死または翌日処刑された長岡藩大隊長山本帯刀以下43名の慰霊祭です。
5	西軍墓地慰霊祭	8月23日	西軍墓地	会津戊辰戦役西軍墳墓史跡保存会	西軍の戦死者150名	土佐、薩摩、長州、大垣、肥州、備州、岡山、館林、越前の西軍各藩士150名（うち1名は藩籍不明）が埋葬されている西軍墓地における慰霊祭です。
6	近藤勇墓前祭	4月25日	天寧寺	会津若松ﾗｲｵﾝｽﾞｸﾗﾌﾞ	近藤勇	土方歳三が建立させたと言われる墓碑前で近藤勇の命日に行われる墓前祭です。 京都三条河原から奪ってきた首を埋葬したとされ、戒名は松平容保によるものです。
7	佐川官兵衛慰霊祭	9月22日	鶴ケ城（若松城）三ノ丸付近	佐川官兵衛顕彰会	佐川官兵衛	西南戦争において熊本で戦死し、その功績を讃え顕彰しています。墓は熊本にあり、妻の墓がある喜多方市には碑が建てられています。
8	中野竹子女史慰霊祭	8月18日	神指町東城戸	中野竹子顕彰会	中野竹子	8月25日、涙橋（神指町）で新政府軍と戦闘。奮戦むなしく、女性と知られ生け捕りを恐れた竹子の母と妹は銃撃された竹子を介錯し 22歳で戦死しました。
9	萱野権兵衛墓前祭	5月20日	天寧寺	会津士魂会	萱野権兵衛	先祖は四国の松山の出身で加藤家の家来でした。戊辰戦争の戦争責任者として東京で切腹した家老です。
10	秋月悌次郎詩碑碑前祭	10月12日	鶴ケ城（若松城）三ノ丸	秋月悌次郎顕彰会	秋月悌次郎	江戸の昌平黌で舎長を務めるなど会津藩の知恵袋でした。薩摩藩や長州藩との交流もあり、京都守護職時代や戊辰戦争でも実力を発揮し開城式に奔走しました。
11	山川健次郎献花祭	7月16日	会津藩校日新館	山川健次郎顕彰会	山川健次郎	秋月悌次郎に見いだされ、城の開城後、会津藩の将来を憂い長州藩の奥平謙輔に預けられました。米国に留学した日本初の物理学者として東京大学、京都大学、九州大学の総長を歴任しました。
12	町野主水家墓前祭	6月9日	融通寺	町野主水家顕彰会	町野主水	剣の達人で幕末から明治期に活躍し、本市の復興に尽力しました。会津弔霊義会の発起人代表として墓前祭が行われています。
13	遠藤敬止翁碑前祭	9月16日	北出丸	遠藤敬止顕彰会	遠藤敬止	鶴ケ城（若松城）の買い取りに資金面で尽力した仙台七十七銀行の頭取の碑前祭が行われています。
14	おけい祭り	10月7日	背炙り山（おけいの墓碑）	おけい顕彰会	おけい	戊辰戦争後の明治2年（1869）、会津藩軍事顧問であった武器商人のヘンリー・スネル（平松武兵衛）とともに、旧会津藩士約40人とともに米国カリフォルニアに渡った日本初のアメリカ移民であるおけいの顕彰祭で墓碑の前で行われます。

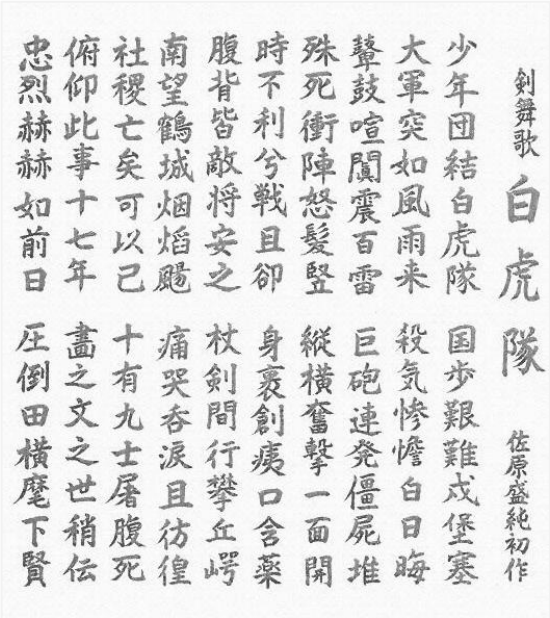


白虎隊士墓前祭の活動場所

②白虎隊剣舞奉納

旧制会津中学校の前身にあたる私黌日新館(明治 16～20 年（1883～1887 年))の初代館長であった中條辰頼（なかじょうときより）が、同日新館教授であった佐原盛純（さはらもりずみ）に白虎隊の霊を慰める剣舞歌の作詞を依頼したことに始まります。

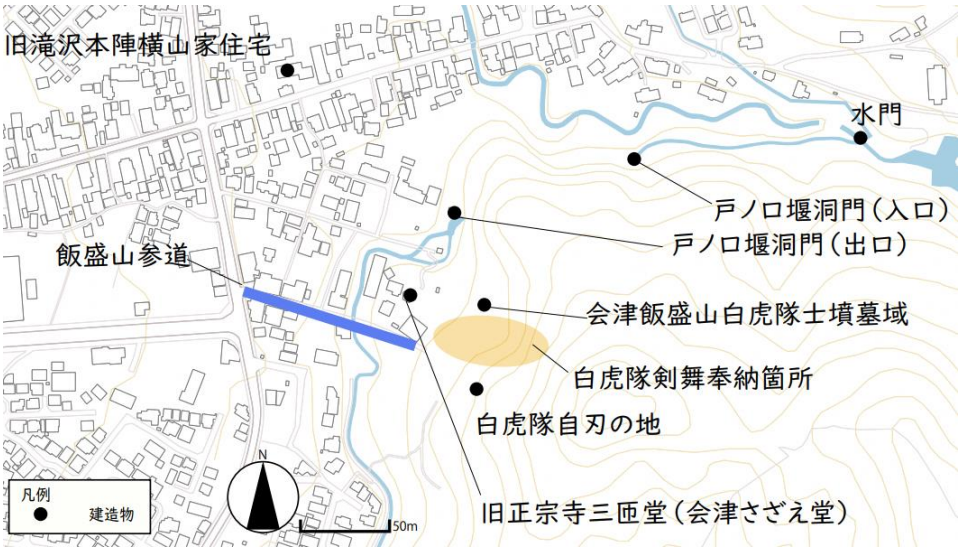
明治 17 年（1884 年）戊辰戦争を戦った元藩士佐原盛純は 20 行の漢詩、剣舞を完成させ、同年、飯盛山の墓前で白虎隊士 17 回忌辰祭が挙行され、そこではじめて奉納されました。白虎隊剣舞は真剣を使っていたことから指や脚を負傷したり、袴を切られたりする者もいましたが、昭和 20 年（1945）旧制会津中学生による墓前奉納を最後に刀を使うことが禁止され、剣舞は中止されることとなりました。その後、卒業生らによる墓前での吟奉納は続けられ、昭和 28 年（1953）に会津高等学校生徒による模造刀を用いた墓前奉納が行われ、白虎隊剣舞が再開されました。以後、毎年９月の墓前祭で剣舞奉納が続けられていることが、会津弔霊義会の活動記録でも確認することができます。会津高等学校の剣舞委員会により、今もなお「見せる剣舞ではなく奉納する剣舞」の原則が貫かれ、奉納に向けた日々の稽古が続けられています。


剣舞歌　白虎隊　佐原盛純初作

少年団結白虎隊　国歩艱難戍堡塞
大軍突如風雨来　殺気惨憺白日晦
聲鼓喧闐震百雷　巨砲連発僵屍堆
殊死衝陣怒髪竪　縦横奮撃一面開
時不利兮戦且卻　身裹創痍口含薬
腹背皆敵将安之　杖剣間行攀丘崿
南望鶴城烟焔颺　痛哭呑涙且彷徨
社稷亡矣可以已　十有九士屠腹死
俯仰此事十七年　畫之文之世稍伝
忠烈赫赫如前日　圧倒田横麾下賢

白虎隊詩碑の書稿

会津高等学校剣舞委員会による奉納



白虎隊剣舞奉納の飯盛山周辺での活動場所

剣舞歌「白虎隊」と訓解

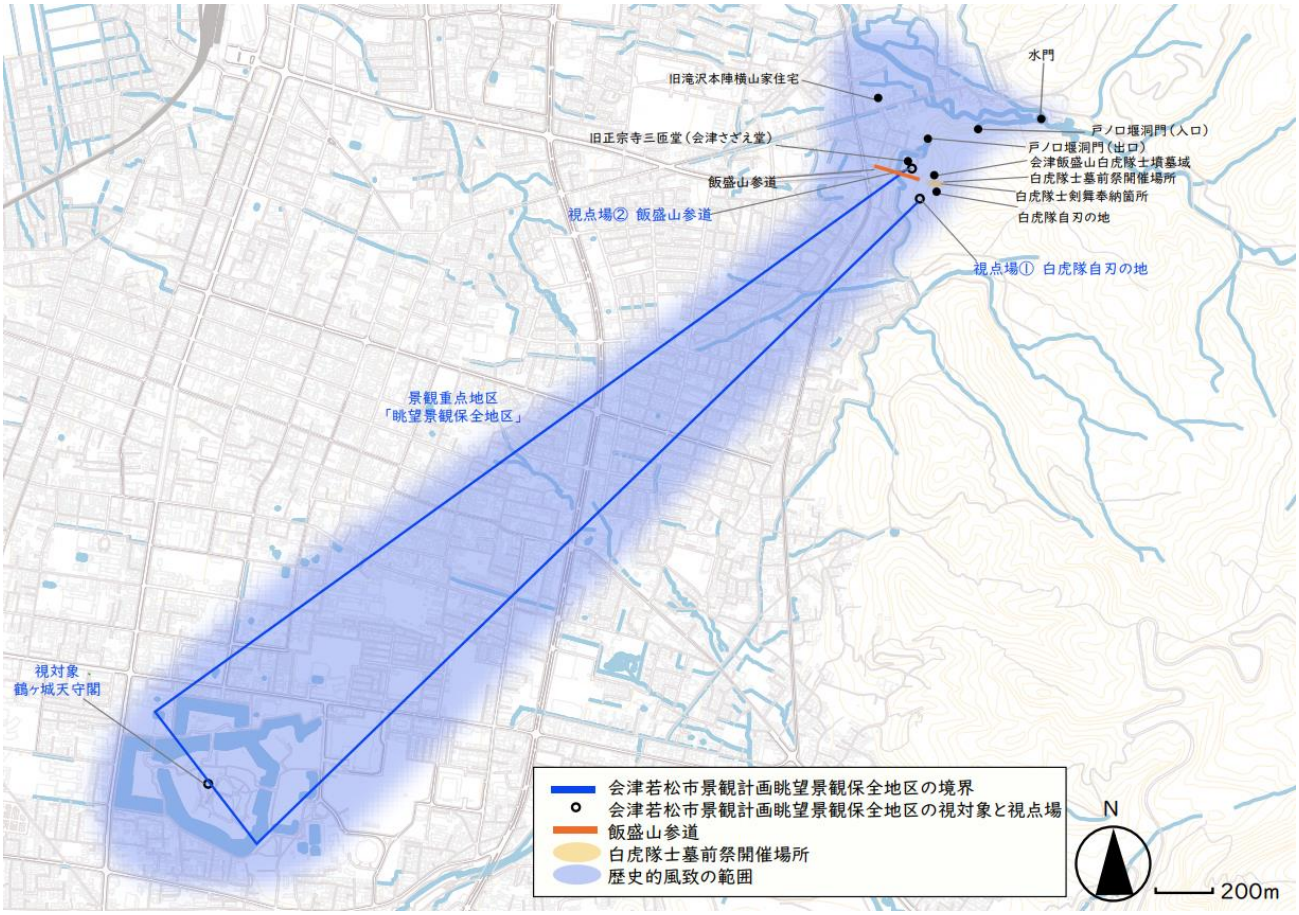
漢詩　白虎隊	文学博士　秋月観暎による訓解
少年団結す白虎の隊 （しょうねんだんけつすびゃっこのたい）	幕末、戊辰（1868 年）戦争の際、会津藩は切迫した西軍の侵攻に備えて、兵備の再編成を行い、藩士の子弟（十六・七才）達は白虎隊と名付ける防衛隊に編成されて団結を固めていた。
国歩艱難堡塞を戍る （こくほかんなんほうさいをまもる）	京都守護職として朝廷に対する忠誠と、幕府への忠勤を貫く会津藩の懸命な努力も空しく、西軍の急迫が伝えられるに及んで、白虎隊は前線に出動し、戸ノ口原の防塁の守備についた。
大軍突如として風雨来る （たいぐんとつじょとしてふううきたる）	その途端、優勢な敵の大軍が突然に姿を現し、恰も疾風・雷雨のように激しく襲いかかってきた。
殺気惨憺白日晦し （さっきさんたんはくじつくらし）	殺気だった戦場は白晝にも関わらず、上空は俄に闇黒となり、緊迫した空気が辺りに漂った。
鼙鼓喧闐百雷震う （へいこけんてんひゃくらいふるう）	襲いかかる敵が馬上から打鳴らす軍鼓の喧しい響は、百雷が一挙に落ちたかのように激烈であった。
巨砲連発僵屍堆し （きょほうれんぱつきょうしうずたかし）	絶え間なく射ち出される大砲の炸裂によって、命を落とす味方の数も次第に増え、横たわる遺体が互いに重り合う有様であった。
殊死陣を衝いて怒髪竪つ （しゅしじんをついてどはつたつ）	白虎隊の少年達は死を決して戦闘に臨み、髪が逆立つ程の激しい闘志を燃やして敵陣に斬り込んだ。
縦横奮撃一面開く （じゅうおうふんげきいちめんひらく）	縦横無尽に奮戦し、ようやく敵軍の包囲を打ち破り、その一方を切り開くことが出来た。
時に利あらず戦い且つ卻く （ときにりあらずたたかいかつしりぞく）	しかし戦況は既に不利であり、止むをえず追い迫る敵軍と闘いを交えながら、除々に後退せざるをえなかった。
身には創痍を裹み口に薬を含む （みにはそういをつつみくちにくすりをふくむ）	激しく闘った隊員の中には、身体に受けた傷口を包んで手当をする者や、疲労を癒す丸薬を口にする者も少くなかった。
腹背は皆敵なり将た安くにか之かん （ふくはいはみなてきなりはたいずくにかゆかん）	そのため、何時しか迅速な敵軍によって前後を塞がれ、何れに脱出すべきか、往く手を阻られてしまった。
剣を杖ついて間行丘嶠を攀ず （けんをつえついてかんこうきゅうがくをよず）	止むなく隊員達は敵軍の目を避け、剣を杖がわりにし、傷つき疲れた身体を支えながら、密かに間道の崖路を攀じ登って後退した。
南鶴ケ城を望めば烟焔飈る （みなみつるがじょうをのぞめばえんえんあがる）	ようやく飯盛山の中腹まで辿りついた隊員達の眼下、遥か南方に拡がる城下の街並は、既に煙と炎に包まれており、鶴ヶ城も既に焼け失せた様子であった。
痛哭涙を呑んで且く彷徨う （つうこくなみだをのんでしばらくさまよう）	この有様を目にした隊員達は激しい悲しみに溢れる涙を堪えながら、思がけぬこの事態に如何に対処すべきか、その判断に迷いながら、しばらく山中を彷徨った。
社稷亡びぬ以て已むべしと （しゃしょくほろびぬもってやむべしと）	その結果、お城の天守閣が焼け陥ちたならば、わが会津藩の滅亡は免れない筈である。吾等もここで生き恥を晒すことなく、共に潔く国に殉ずべきであるとの結論に達し、
十有九士腹を屠って死す （じゅうゆうきゅうしはらをほふってしす）	最後まで生き残っていた十九人の白虎隊の少年達は、それぞれ自らの腹や喉を掻き切って命を絶った。
俯仰すれば此事十七年 （ふぎょうすればこのことじゅうななとせ）	顧みれば、この白虎隊士の壮烈な自刃のことがあってから、今日まで既に十七年の歳月が流れ去っている。
之を画にし之を文にして世稍やく伝う （これをえにしこれをふみにしてよようやくつとう）	幸いにして、この少年隊の壮絶な自刃の最後の模様は絵画や文章をもって描かれ、忘れ去られることなく語り継がれてきており、
忠烈は赫赫として前日の如し （ちゅうれつはかつかくとしてぜんじつのごとし）	その忠烈な自刃の行動に対する世人の称讃は、恰もそれが前日の出来ごとであるかのように、益々鮮かな赫きを増すに至った。
圧倒す田横麾下の賢 （あっとうすでんおうきかのけん）	今や、この白虎隊の至純な忠誠に対する称讃の声は、古来、忠賢の精華として喧伝されてきた古代中国の斉王、田横の部下の殉死をたたえる名声 ※ を圧倒するに至った。

※古代中国における斉国の王であった田横に対する家臣の忠義にまつわる故事

（4）おわりに

戊辰戦争のおり、旧滝沢本陣より、16 ～17 歳の少年たちで編成された白虎士中二番隊が出陣し、戸ノ口原合戦場から退却し、滝沢峠の間道を通り、戸ノ口堰の洞門をくぐり飯盛山に辿り着くと、鶴ケ城（若松城）の天守閣は黒煙のなかに見え隠れして、「城は陥落したか、今は主君のために殉じよう」とした隊士殉難の事績を広く世の人に知らせるとともに、後進の青少年らを鼓舞しようとの志から、白虎隊士を偲ぶための活動が行われたことが始まりとなり、現在まで会津弔霊義会による白虎隊士墓前祭は続けられています。

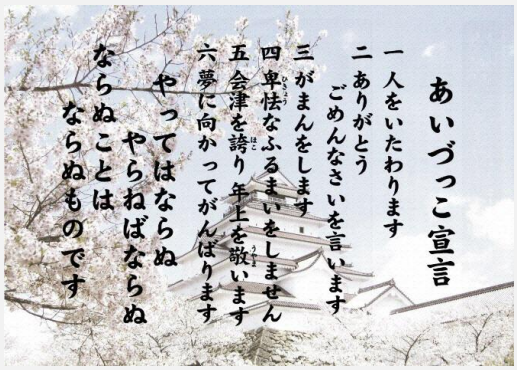
戦死した少年戦士たちを慰霊する白虎隊墓前祭は飯盛山の白虎隊士十九士の墓前で毎年４月 24 日と９月 24 日の春秋２回行われ、全国から多くの参列が行われており、白虎隊士を偲ぶ参拝者により献じられる線香は後を絶たず、白煙とともに周囲一帯を覆い、歴史的風致を形成しています。



歴史的風致の範囲

【コラム　現代版「什の掟」】
「什の掟」とは
同じ町に住む６歳から９歳までの藩士の子供たちは 10 人前後で集まりをつくり、これを会津藩では「什　（じゅう）」と呼び、そのうちの年長者が什長（座長）となりました。
毎日順番に、什の仲間のいずれかの家に集まり、什長が次のような「話」を皆に申し聞かせ、すべて終わると、昨日から今日にかけて「話」に背いた者がいなかったかどうかの反省を行いました。
一、年長者の言ふことに背いてはなりませぬ
一、年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
一、嘘言（うそ）を言ふことはなりませぬ
一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
一、弱い者をいぢ（じ）めてはなりませぬ
一、戸外で物を食べてはなりませぬ
一、戸外で婦人と言葉を交へてはなりませぬ
ならぬことはならぬものです
什により、若干内容が異なる部分があったといわれますが、終わりの「ならぬことはならぬものです」は、どの什も共通であったとされます。これらのきまりは、すべて大人に言われてつくったものではなく、子供たちが制約や強制を受けずに自分たち自身でつくり、「会津武士の子はこうあるべきだ」ということを互いに約束し、励み合ったと考えられています。

「あいづっこ宣言」



会津若松市では、市民一人ひとりが「次代を担う会津人の育成」を自らの課題として捉え、家庭や学校、地域が一体となり、それぞれの立場から青少年健全育成のための行動を起こしていく「共通の指針」として、「青少年の心を育てる市民行動プラン“あいづっこ宣言”」を策定しました。
　令和３年度に策定から 20 周年を迎えた「あいづっこ宣言」は、会津の伝統的な規範意識を踏まえて、「会津に育つすべての子どもが、このような子どもに育ってほしい」という想いを示したものであり、子供からお年寄りまで、すべての者が一丸となって取り組めるよう、「わかりやすい」、「唱えやすい」、「訴えやすい」ことを基本に作られました。
「あいづっこ宣言」は、子供の立場からは「このような子ども・会津人になります」という宣言でありますが、同時に、大人の立場からは「子どもたちの手本となり、このような子ども・会津人を育てます」という宣言でもあります。

一　人をいたわります
・お年寄りや困っている人に親切にしましょう
・自分をはじめ、命あるものを大切にしましょう
・みんなのために、すすんでボランティア活動をしましょう

二　ありがとうごめんなさいを言います
・「おかげさま」の気持ちをもちましょう
・まちがったことは素直に認め、あやまる気持ちをもちましょう
・礼儀について心がけ、言葉づかいに注意しましょう

三　がまんをします
・甘えをおさえ、わがままをいわないようにしましょう
・失敗や困難な体験も大きな経験となります
・なにごとも最後までがんばりましょう

四　卑怯なふるまいをしません
・自分さえよければという考えはなくしましょう
・うそをついたり、人のいやがることはしないようにしましょう
・人として恥じない正々堂々とした行いをしましょう

五　会津を誇り年上を敬います
・自然体験や社会体験を通して、会津のことをよく知りましょう
・会津の歴史や文化を学び、先人、両親、そして年上の人を尊敬しましょう
・生まれ育った会津を誇り、愛する気持ちをもちましょう

六　夢に向かってがんばります
・目標に向かって、くじけずに努力しましょう
・みんなの夢のために、もてる力を使いましょう
・みんなでよりよい会津をつくりましょう

やってはならぬ　やらねばならぬ　ならぬことはならぬものです
・わるい誘惑に負けない強い心を持ちましょう
・やらなくてはならないことは、しっかりとやりましょう
・自分勝手な行動はやめ、社会生活のルールをまもりましょう